

寺田寅彦『夏目漱石先生の追憶』（抜粋）

いつか早稲田の応接間で先生と話をしていたら廊下のほうから粗末な服装をした変な男が酔つぱらつたふうでうそそはいつて来て先生の前へすわりこんだと思うと、いきなり大声で何かしら失礼な口調でののしり始めた。あとで聞くとそれはM君が連れて来た有名な過去の文士の〇というのであった。連れて来たM君はこの意外の光景にすっかり面食らつて立ち往生をしたそうであるが、その時先生のこの醉漢に対する応答の態度がおもしろかつた。相手の酔つぱらいの巻き舌に対して、どつちも負けずに同じような態度と口調で、小気味よくやりとりをしていた。負けぬ気の生糸の江戸ヅ子としての先生を、この時目前に見ることができたような気がするのであった。先生最後の大患のときは、自分もちようど同じような病気にかかって弱っていた。江戸川畔の花屋でベニアの鉢を求めてお見舞いに行つたときは、もう面会を許されなかつた。奥さんがその花を持って病室へ行つた。一言「きれいだな」と言われたそうである。勝手のほうの炉のそばでM医師と話をしていたら急に病室のほうで苦しそうなうなり声が聞こえて、その時にまた多量の出血があつたようであつた。臨終には間に合わず、わざわざ飛んで來てくれたK君の最後のしらせに、人力にゆられて早稲田まで行つた。その途中で、車の前面の幌にはまつたセルロイドの窓越しに見る街路の灯が、妙にぼやけた星形に見え、それが不思議に物狂わしくおどり狂うように思われたのであつた。先生からはいろいろのものを教えられた。俳句の技巧を教わつたというだけではなくて、自然の美しさを自分自身の目で発見することを教わつた。同じようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものとを見分け、そうして真なるものを愛し偽なるものを憎むべき事を教えられた。しかし自分の中にいる極端なエゴイストに言わせれば、自分にとつては先生が俳句がうまかろうが、まずかろうが、英文学に通じていようがいまいが、そんな事はどうでもよかつた。いわんや先生が大文豪にならうがなるまいが、そんなことは問題にも何もならなかつた。むしろ先生がいつまでも名もないただの学校の先生であつてくれたほうがよかつたではないかというような気がするくらいである。先生が大家にならなかつたら少なくももつと長生きをされたであろうという気がするのである。いろいろな不幸のために心が重くなつたときに、先生に会つて話をしていると心の重荷がいつのまにか軽くなつていて、不平や煩悶のために心の暗くなつた時に先生と相対していると、そういう心の黒雲がきれいに吹き払われ、新しい氣分で自分の仕事に全力を注ぐことができた。先生といふものの存在そのものが心の糧となり医薬となるのであつた。こういう不思議な影響は先生の中のどういところから流れ出でるのであつたか、それを分析しうるほどに先生を客観する事は問題であり、またしようとは思わない。

下の細道をたどつて先生の門下に集まつた多くの若い人々の心はおそらく皆自分と同じようなものであつたろうと思われる。それで自分のここに書いたこの取り止めもない追憶が、さもさも自分で先生を独占していたかのように読者に見えるとすれば、それはおそらく他の多くの門下生の各自の偽らぬ心持ちを代表するものとして了解しゆるしてもらわるべきだと思う。そういう同門下の人たちと先生没後の今日、時おり何かの機会で顔を合わせるごとに感じる名状し難いなつかしさの奥には、千駄木や早稲田の先生の家における、昔の愉快な集会の記憶が背景となつて隠れているであろう。記憶の悪い自分のこの追憶の記録には、おそらく時代の錯誤や、事実の思い違いがいろいろあるであろうと思う。ただ自分の主観の世界における先生のおもかげを、自分としてはできるだけ忠実に書いてみたつもりであるが、学者として、作家として、また人間としての先生の面影を紹介するものとしては、あまりにも零細な枝葉の断片に過ぎないものである。これについてはひたすらに読者ならびに同門下諸賢の寛容を祈る次第である。

（昭和七年十二月）



寺田寅彦